

ゲーテのバラード „Wirkung in die Ferne“ における „zur Hand“ の解釈

—Grimm 対 Sanders—

伊 藤 卓 立

I 問題提起 Grimm の辞書

1874年にゲーテは、「高く評価し、しばしば引用もした」「オランダの解剖学の教授」¹⁾カンパー (Camper) に「上顎間骨が人間とその他の動物たちと共通している」(daß der Zwischenknochen der oberen Kinnlade dem Menschen mit den übrigen Tieren gemein sei)²⁾という、現在では「ゲーテ縫合」³⁾として認められている「ゲーテの最初の重要な自然科学の発見」⁴⁾に関する論文を送った⁵⁾。しかし、「ゲーテ時代には多くの学者たちは・・・人間の顎間骨の存在に対して反対の見解を述べた。」⁶⁾それ故、ゲーテはこの論文を20年後の1784年になってようやく „Dem Menschen mit den Tieren ist ein Zwischenknochen der oberen Kinnlade zuzuschreiben.“ という表題で公にした⁷⁾。

ところでこの論文は、全般に解剖学の知識を有することを前提としているので、一般の読者には難解である。しかし、次の一文では、難解な専門用語は Os intermaxillare 以外には用いられていないのにもかかわらず、理解しがたい語法に出会う。それは、下の引用文中の下線を引いて示した „nach der Hand“ である。

... um seinen armen Galen gegen Basel zu retten, glaubt er (Jac. Silvius), vor alters hätten die Menschen alle ein separates Os intermaxillare gehabt, das sich nach der Hand durch Debauchen und zunehmenden Luxus der Nachwelt verloren.⁸⁾ (下線は著者、以下同じ)

先ず „nach der Hand“ を除いて邦訳すると、おおよそ次のようになる。

太古において (vor alters) すべての人間には分離した顎間骨 (ein separates Os intermaxillare) があった, しかし, その顎間骨は後世 (Nachwelt) の暴飲暴食と留まるところを知らない乱れた生活が原因で (durch) 失われた。

即ち, 太古の人類には現在の猿と同様に分離していた顎間骨が備わっていたが, 現在ではその縫合の痕跡さえも失われ, 人間の顎間骨は一枚の骨となっているように見える。この場合, 顎間骨の分離とその縫合の痕跡の喪失の原因 (暴飲暴食と留まるところを知らない乱れた生活) を示しているのが前置詞 „durch“ であると考えられる事ができる。即ち, „nach der Hand“ を訳出せずとも, 文意は十分に理解する事ができる。それ故に, 訳出されていない „nach der Hand“ は一体いかなる意味を有し, 文法的にいかなる働きをしているのか, という疑問が浮かぶ。そこで, 先ず初歩に帰って考えれば, 前置詞句は一般に次の二つの機能を有する:

- ① 動詞などの状況を示す副詞的用法
- ② 名詞の後ろに置かれ, その名詞を修飾する形容詞的用法

この基本的用法から考えれば, 直前に名詞が置かれていないこの „nach der Hand“ は状況を示す副詞的用法である, と判断する事ができる。しかし, 辞書を利用する必要性を全く感じさせない程字面が単純なこの語法は一体「如何なる意味合い」を表現しているのだろうか, という疑問は依然として残されたままである。

そこで, 唯一見つかった木下空太郎の邦訳を参照・検討したい。

…そしてかの気の毒なガレンをエザアルに対して救助する為に, 古昔は人間は皆分離せる顎間骨を有してゐたが, 後世の暴食と増長せる奢侈とによる負担の結果失われてしまったと(彼:Jac. Sylviusは)解した⁹⁾。

この木下訳の「後世の暴食と増長せる奢侈とによる負担の結果」というフレーズに於いて使用されている「による」が durch の邦訳であると考えられる事ができる, すると必然的に続く「負担の結果」が „nach der Hand“ の邦

訳である、と判断せねばならない。しかし、両者の間の意味上の乖離は甚だしい、加えて、„nach der Hand“を「負担の結果」と邦訳する語学的根拠も明らかでない。

ところで、小学館の『独和大辞典』（1985年）の巻末に掲載されている「主要参考文献」には次の6種類の辞書が挙げられている。

Brockhaus-Wahrig. Deutsches Wörterbuch. 6 Bde. Wiesbaden/Stuttgart 1980-84. (=Brockhaus-Wahrig)

Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. 6 Bde. Mannheim 1976-81. (=Duden I)

Duden. Deutsches Universalwörterbuch. Mannheim 1983. (=Duden II)

R. Klappenbach / W. Steinitz: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. 6 Bde. Berlin 1964-77. (=Klappenbach)

Meyers Enzyklopädisches Lexikon. Bd. 30-32: Deutsches Wörterbuch. 3 Bde. Mannheim 1979-82 (= Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache) . (=Meyer Lexikon)

G. Wahrig:Deutsches Wörterbuch. Gütersloh 1975, 1980. (=Wahrig)

しかし、これらの辞書を参照しても、„nach der Hand“に関して納得することができる説明は見当たらない。第一に、Klappenbachの辞典の表題„Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache“が示しているように、現代ドイツ語であれば、上記6冊の辞書は実に有能である、しかしこれまでの経験から判断すると¹⁰⁾、18世紀、19世紀のドイツ語を読む場合、これらの辞書は時に不十分である。すると、この„nach der Hand“は現代ドイツ語からは失われてしまっている語法である、と考えるのが妥当である。

そこで、Grimmの『ドイツ語辞典』を参照すると、我々にとって有用な次の説明が掲載されている。

an der hand, bei der hand, zur hand, zu handen ist, steht *der oder das, was eine danach ausgestreckte hand schnell erreicht, so dass diese fügungen nähe und bereitschaft hervorheben* (.)¹¹⁾

.....
hieraus haben sich drei adverbial gewordene verbindungen ergeben, vor der hand, zu hand, nach der hand.¹²⁾

„an der hand, bei der hand, zur hand, zu handen sein, stehen“ は、手を伸ばせば即座に届く所にあるという事であり、その結果これらの前置詞慣用句は「近くにある事」や「用意のできている事」を強調する事になるのである。

.....
ここから次の三種類の副詞となった前置詞慣用句が生じたのである：
vor der hand, zu hand, nach der hand.

これらの三種類の前置詞慣用句がかつて完全に副詞となっていた事実は、vorderhand¹³⁾, nachderhand¹⁴⁾, zuhand¹⁵⁾ が辞書の見出し語として採録されている場合がある事、及び、1828年に執筆されたハイネの „Reisebilder“ の一文が1923年の全集では、

... und hätte mich nicht wichtige Gefühle nach Süden gezogen, so wäre ich vorderhand in Trient geblieben, ...¹⁶⁾

と印刷されている事によって証明される。ところで、興味深いことに、上で引用した全集より60年以上前の1860年に出版された別の全集¹⁷⁾の当該箇所は „so wäre ich vor der Hand in Trient geblieben“ となっていたが、岩崎英二郎は、「古くは、„vor der Hand“ という書記法も行われていた」¹⁸⁾、と言っている。

また、ゲーテのバラード „Rettung“ の最終連においても „vor der Hand“ は以下のように使用されている。

Und dann klagt' ich ihr meine Noth,
Sie schlug die Augen lieblich nieder;
Ich küßte sie und sie mich wieder,
Und — vor der Hand nichts mehr von Tod.¹⁹⁾

ところで、ここで使用されている „vorderhand“ 或いは „vor der Hand“ は如何なる意味であろうか。やはり回答はない。

又、ゲーテはバラード „Wirkung in die Ferne“ において、

Sie (Königin) spricht zum Pagen: „Du läufst einmal
Und holst mir den Beutel zum Spiele.
Er liegt zur Hand
Auf meines Tisches Rand.“²⁰⁾

と書いているが、この „zur Hand“ は如何なる意味であろうか。高安国世は「袋は私の机の上に／出ていたはず」²¹⁾と邦訳しているので、„zur Hand“ を「はず」と解釈したのであるが、この邦訳はしかし翻訳の射程内に収まっているのであろうか。

ところで、驚くべきことに、ここで使用されている „zur Hand“ に関してグリムの『ドイツ語辞典』の説明²²⁾とザンダースの『ドイツ語辞典』の説明²³⁾は全く相容れないのである。

そこで、この小論では、これらの三種類の副詞の前置詞慣用句を、歴史的・通時的に概観してそれらの意味合いを明らかにし、もしも邦訳に誤解・誤訳があるならば、正し、ドイツ語理解にささやかな寄与をしたい。ただし、この小論の目的は、グリムの辞典とザンダースの辞典とではその説明が全く相容れないゲーテのバラード „Wirkung in die Ferne“ の中で用いられている „zur Hand“ の意味を明らかにし、グリムとザンダースのいずれの説明が適切であるか、という疑問を明らかにする事である。

II-1 nach der Hand, vor der Hand, zur Hand の本来の意味

このタイトルの解明について参考となるのは Adelung の辞書である。その初版 „Versuch eines vollständigen grammatisch-kritisches Wörterbuches der hochdeutschen Mundart. In 5 Bdn“ は 1774 年～1786 年に、続く増補改訂第二版 „Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart. In 4 Bdn“ は 1793 年～1802 年に出版されたが、我々にとって重要な「nach der Hand, vor der Hand, zur Hand の本来の意味」について初版から一貫して次のように説明している。

In einigen adverbialischen R. A. (=Redensart) hat es die Bedeutung einer Zeit (.) (Bd. 2, S.940) (初版に従い、第二版を使用する場合は指示する。)
若干の副詞的慣用句において Hand は「時の意味」を持つ。

我々は先ずここで、Hand には「時」を意味する副詞的慣用句の用法がある、という事を銘記せねばならない。

この説明に続けて Adelung は „zur Hand“, „vor der Hand“, „nach der Hand“ の個別の説明を展開させているので、我々も次にその検討に移りたい。しかし、我々の問題設定に従って、先ずゲーテの『顎間骨』で使用されていた „nach der Hand“, 次にハイネの „Reisebilder“ で使用されていた „vor der Hand“, 最後にゲーテのバラード „Wirkung in die Ferne“ で使用されていた „zur Hand“ の順番で検討を進める。

II-2 nach der Hand について

先ず、 „nach der Hand“ を辞書²⁴⁾ で調べると次のようになる。

- 1) Adelung (1775) , Bd. I, S. 940.

nachher, nachmals

nachher: 「(= später) a)あとで、のちほど。b)そのあとで、それに続いて、それから。」²⁵⁾

nachmals: 「後 (のち) に、あとで、あとから」

- 2) Campe (1808) , Bd. II, S. 528.

nachher, in Zukunft.

- 3) Heyse (1833) , Bd.I, S. 655.

veraltet für nachher, nachmals.

- 4) Sanders (1876) , Bd. I, S. 681.

namentlich zeitlich = nachher, hinterher

hinterher: 「(時間的) (nachher, danach) (⇔ vorher) そのあとから、そのあと (で)、後になって」

- 5) Grimm (1877) , Bd. IV-II, S. 348.

gegensatz von der hand, in zeitlicher bedeutung später, nachher, weiterhin .

例文 : doch gieng nach der handt die sage.

nach der hand kam der pfarrherr.

weiterhin: さらに引き続き, (これまでと同様) 今後も。

6) Paul (1966) , S. 288.

Auf das zeitliche Gebiet übertragen *vorhanden* ... wahl als Gegenstück dazu gebildet *nach der Hand* (späterhin) . †

恐らく, 時間を示す用法へ転用された „vorhanden“ の対語として „nach der Hand“ が造語されたのであろう。

以上の辞書の説明に従えば, „nach der Hand“ は明らかに「時間的な意味」で用いられて,「あとで,後に,後になって」という邦語に対応する。そこで,この見解の正しさを確認するために,グリムの辞書に挙げられている例文を邦訳しておく。

doch gieng nach der handt die sage.

「だがしかし後になると噂が広まった。」

nach der hand kam der pfarrherr.

「後になると主任司祭が来た。」

この例文からも明らかなように,問題提起で取り上げたゲーテの『顎間骨』に関する論文中の „nach der Hand“ も時間的用法であると解釈して,「その後」,「後になると」等の邦語を用いて訳出されるべきである。次に,この結論に基づいた邦訳を示したい。

... um seinen armen Galen gegen Basel zu retten, glaubt er (Jac.Silvius) , vor alters hätten die Menschen alle ein separates Os intermaxillare gehabt, das sich nach der Hand durch Debauchen und zunehmenden Luxus der Nachwelt verloren.

... 彼のかわいそうなガレンをバーゼルの攻撃から救うために, Jac. ジルヴィウスは, 太古において (vor alters) すべての人間には分離した顎間骨 (ein separates Os intermaxillare) があったが, その後 (nach der Hand) その顎間骨は後世 (Nachwelt) の暴飲暴食と留まるところを知らない乱れた生活が原因で (durch) 失われてしまった, と確信を述べた。

即ち, „nach der Hand“ は, 「すべての人間に分離した顎間骨が備わって

いた」「太古」„vor alters“ に対応して、「その後」、即ち、時の経過と共に、その分離の痕跡さえもほとんど癒着して消滅し、一枚の骨に見えるようになってしまった、という「時間的前後関係」を表現している。しかし、木下訳の「負担の結果」は「因果関係」を示す事ができても、「時間的前後関係」を示すことはできない。それ故、原因を示す „durch“ とほぼ同じ範疇内で „nach der Hand“ を「負担の結果」と訳出して時間的前後関係を無視した木下訳は誤読・誤解・誤訳と言うべきである。しかしながら、„nach der Hand“ は、1833年に出版された Heyse (S. 655) の説明に従えば、既に「古語」(veraltet)であった事、又、1966年に出版された Paul の辞書 (S. 288) では、vorderhand の対語として造語された „nach der Hand“ には「死語」(unüblich)を示す「ダガー」(†)が付けられている事を考えると、昼は医学者であり、夜の数時間に詩人・文学者として活動した木下柰太郎に対してこの「誤読・誤解・誤訳」は攻められるべき事ではなからう。²⁶⁾ 第一、木下の邦訳はさほど原意を損なうものでもないのであるから。

II-3 vor der Hand の解釈について

先ず、„vor der Hand“ を辞書で調べると次のようになる。

7) Stieler (1691), Bd. 1, S. 751.

初期新高ドイツ語の時代に出版されたこの辞書には für der Hand が見出し語として掲載され、我々にとって興味深い事に、次のように説明されている。

Für der Hand : imparæsentiarum.

注：ラテン語 imparæsentiarum は、Langenscheidts Großwörterbuch.

Teil I Lateinisch-Deutsch (1971) では次のように説明されている：
(eig. bei der gegenwärtigen Lage der Dinge) (「事物の現状」と、理解しておく) für jetzt, vor der Hand. (S. 346)

Stieler に従えば、„vor der Hand“ は „für jetzt“ の意味になる。ところで、岩崎英二郎の、小野寺と共著である『ドイツ語不変化詞辞典』(東京 1969 年, 349 頁)によれば、「für jetzt (古くは vor jetzt)『さしあたり』」と注が付けられている。又、岩崎の『ドイツ語副詞辞典』(東京 1998 年, 711 頁)では「いまのところ」、「さしあたり」、「当面」の意味に用いられる、と説明されている。それ故、我々は次

のように言う事ができる：

vor der Hand は、für jetzt と同じ意味合いであり、「いまのところ」、
「さしあたり」、「当面」を意味する。

- 8) Adelung (1775), Bd.1, S. 940.

Vor der Hand, vor jetzt. Lassen Sie das vor der Hand gut seyn.

「あなた、さしあたり現状で良しとしないよ。」²⁷⁾

- 9) Campe (1808), Bd, 2, S. 528.

Vor der Hand, für jetzt, für diesen Augenblick usw.

- 10) Heyse (1833), Bd. 1, S. 655.

vor der Hand, d. i. für jetzt, für den gegenwärtigen Augenblick.

- 11) Sanders (1876), Bd. 1, S. 681.

Vor der Hand zuwerfen, im Kartenspiel, eh die Reihe an Einem ist;

「カード遊びで、„vor der Hand zuwerfen“ とは、„eh die Reihe an Einem ist“, 即ち、自分の順番になるよりも『先に』カードを出す、という
意味である。」(以下の用法がここから派生した。)

Meine Rechnung nicht bis Neujahr stehen zu lassen, sondern ich wollte sie
als vor der Hand [**schon früher, jetzt**] bezahlen.

「私は、請求書を新年までそのままにしておくのではなく、もっと早く
今すぐにでも払いたかった。」

Mit diesem kleinen Anfang waren wir vor der Hand [**fürs Erste, vorläufig**]
zufrieden.

注：fürs Erste 「さしあたり、当分の間」²⁸⁾

vorläufig 「さしあたり、ここ当分の、暫定的な、仮の」

「このささやかな始まりに私たちは当分の間満足した。」

Ich küßte sie und sie mich wieder / und vor der Hand [**nun**] Nichts mehr von
Tod. (Goethe: Rettung)

即ち、Sandersはこの„vor der Hand“を„nun“と解釈している。

- 12) Grimm (1877), Bd. IV-II, S. 348.

vor der hand, *zeitlich verwendet*, = *zunächst, vorläufig*:

hätten mich nicht wichtige gefühle nach süden hingezogen, so wäre ich

vor der hand in Trient geblieben. (Heine: Reisebilder „Italien“) (邦訳は以下
で提示される。)

ich küsste sie und sie mich wieder,
und — vor der hand nichts mehr von tod. (Goethe: Rettung)

- 13) Heyne (1906) , Bd. 2, S. 36.

vor der hand: zunächst, vorläufig

zunächst: 「さしあたり, 当分」

sie könnte vor der hand nicht mehr thun.

彼女は、当分の間とはいえ、行動を起こすことはできないであろう。

- 14) H. Paul (1966) , S. 288.

Auf das zeitliche Gebiet übertragen *vorderhand* (gegenwärtig, in der nächsten Zeit), wohl als Gegenstück dazu gebildet *nach der Hand* (später-hin) †.

注: in der nächsten Zeit 「間もなく, 近々」

späterhin 「のちに (なって), あとで」

「時の領域へ転用され, (gegenwärtig, in der nächsten Zeit を意味する)

vorderhand は, (späterhin を意味する) *nach der Hand* の対語として造語された。」

以上の辞書の説明から „vor der Hand“ が „für jetzt“, „vor jetzt“, „für diesen Augenblick“, „für gegenwärtigen Augenblick“, „jetzt“, „nun“, „zunächst“, „in der nächsten Zeit“, „späterhin“ を意味する事を考慮すれば, „vor der Hand“ は「現在」から「間近の未来」までの „Zeitraum“ (時間) を表現する, と理解するべきである。

ここで, 問題提起で提示したハイネのイタリア紀行の一文の試訳を提示したい。

hätten mich nicht wichtige gefühle nach süden hingezogen, so wäre ich

vor der hand in Trient geblieben. (Heine: Reisebilder „Italien“)

もしも感情の強烈な力が私を南の世界へと引きつけなかったならば,

私はしばらくの間トリエントに滞在したことであろう。

ところで, 木村謹治訳と木庭宏訳と二種類の邦訳が見つかったが, „vor der Hand“ はそれぞれ「当分の間」(木村)²⁹⁾, 「当分のあいだ」(木庭)³⁰⁾と邦訳され, 両邦訳は基本的に全く同じであり, 翻訳の許容範囲内にある,

と言える。

次に、ゲーテのバラード „Rettung“ の最終行で使用されている „vor der Hand“ を考察したい。

Und dann klag' ich ihr meine Noth,
Sie schlug die Augen lieblich nieder;
Ich küsste sie und sie mich wieder,
Und — vor der Hand nichts mehr von Tod. (Goethe:Rettung) ³¹⁾

先ず入手できた二種類の邦訳を引用したい。

此の身の不運を訴えると
愛らしくケーチヒェンは眼を伏せた。
くちづけするとそれを返した。
そこで—死なんかけし飛んだ。(片山敏彦訳) ³²⁾

そこで悩みを訴えたら
娘は愛らしく眼を伏せた
ぼくは娘にキスをした 娘もぼくにキスをした
と言うわけで—死ぬ話はさしあたりどこ吹く風 (山口四郎訳) ³³⁾

続いて片山訳の最終行を分析すると、次のようになる：

「そこで」 = und

「死なんかけし飛んだ」 = nichts mehr von Tod

すると片山訳では „vor der Hand“ が訳出されていない事は明らかである。しかし、ケーチヒェンがキスを返してくれたので、その時以來しばらくの間「死ぬ事」などぼくの頭の中から消え失せた、と言っているのであるから、この „vor der Hand“ は「自殺から救われた瞬間」(für den gegenwärtigen Augenblick)とそれに「続く時間」(in der nächsten Zeit)を示し、このバラードの文学的に重要な結論を担っている、と言うべきである。それ故、この重要な役割を担わされた „vor der Hand“ を片山は明確に訳出するべきであった。他方、山口訳に於いてこの „vor der Hand“ は明確に「さしあたり」と訳出され、妥当な邦訳であると判断する事ができる。

III-1 „zur Hand“ の解釈について ～ Grimm と Sanders 以外の辞典～

先ず, „zur Hand“ を Grimm 及び Sanders 以外の辞典で調べると次のようになる。

15) Lexer: *Mittelhochdeutsches Handwörterbuch*. 1. Bd. 1878, S. 1041.

ze-hand adv. auf der stelle, sogleich, alsbald

注: auf der Stelle 「(sofort) その場で, 即座に, すぐに」³⁴⁾

Der Täter wurde auf der Stelle festgenommen.

「犯人は, その場で逮捕された。」

Du bringst das Geld zurück, und zwar auf der Stelle.

「その金を返すんだ, それもいますぐに。」

Ich bekam frühe einen Brief von meinem lieben Bruder Georg Philipp

— ich beantwortete ihn auf der Stelle.

「朝早く, 愛する兄ゲオルク・フィーリップの手紙を受け取った。

私はその場で返事を書いた。」

: sogleich 「すぐに, ただちに, 即刻」

Sie durchschaute sogleich seine Absicht.

「彼女は, 彼の意図をすぐさま見抜いた。」

Als er zu Hause kam, legte er sich sogleich zu Bett (.)

「家に戻ると, 彼は, すぐに床についた。」

: alsbald 「【雅】 (sogleich) 直ちに, 即座に」

Die blasse Frau trank alsbald den Inhalt des Bechers,... (.)

「すぐに青白い顔の女性は, 杯の中身を飲んだ, …」

15a) Götze: *Frühneuhochdeutsches Glossar*. 1968, S. 238.

zuhand adv. sogleich.

16) Stieler: *Der teutschen Sprache Stammbaum und Fortwachs oder teutscher Sprachschatz*. Bd. 1. 1691. S. 751.

protinus.

注: protinus は, Georges ラテン語辞典³⁵⁾ によると次のように説明されている。

von der Unmittelbarkeit in der Zeitfolge, sofort, stracks, sogleich, alsbald

: sofort 「すぐに, ただちに, 即刻」³⁶⁾

Ich komme sofort wieder.

「すぐに戻ってきます」

: stracks 「(sofort) すぐに, ただちに即刻」

Stracks riß sie den Brief entzwei, kaum daß sie ihn gelesen hatte.

「その手紙を読み終わるやいなや, 彼女は即座にそれを引き裂いた。」

- 17) Adelung (2. Aufl. 1796), Bd. 2, S. 944.

In einigen adverbischen R. A. (Redensarten) hat es die Bedeutung einer Zeit.

Zu Hand, bey dem Opitz zi henti, für sogleich, schnell, ist veraltet.

Zu Handt der jung ward überütz (überdrüssig)

der weldt. H. Sachs,

すぐに若者はこの世界に

飽きてしまった。 (H. ザックス)

Im Bergbaue sagt man noch zur Hand arbeiten, d. i. eifrig, fleißig, schnell.

「鉱山では, 未だに „zur Hand arbeiten“ という言い回しが使われるが, それは „eifrig, fleißig, schnell, (熱心に, 勤勉に, す《手》早く働く) の意味である。」

- 18) Campe (1808), Bd. 2, S. 528.

† Die gegenwärtige Zeit. Zu Hand, sogleich, schnell.

Zu Handt der jung ward überütz (überdrüssig)

Der Welt.

Im Bergbaue sagt man noch zur Hand arbeiten, für^{36a)} fleißig, schnell.

- 19) Heyse (1833), Bd. 1, S. 655.

bei der Hand sein, etwas bei der Hand oder zur Hand haben, d. i. gegenwärtig, bereit (.)

注: gegenwärtig (hier befindlich) ここにある。(相良独和大辞典 東京 1972年。567頁。)

- 20) Wenig (1885), S. 376.

(vorderhand) für jetzt, (nachderhand) nachher, nachmals.

注: zurhand は掲載されていない。

- 21) Heyne (1906), Bd.2, S. 36.

zeitbestimmend: vor der hand, zunächst, vorläufig.

注: nach der hand, zur hand は掲載されていない。

以上の辞書の説明をまとめると、中世ドイツ語から続く „zur Hand“ の「時を示す意味合い」(sogleich, schnell) は、Adelung (1775年)以降になると「古語」と感じられるようになり、その意味合いも「現在の、現今の、いまの：居合わせている、出席している」(gegenwärtig)に変化し、更に、„zur Hand“の本来の意味「手の届く所にある」から「用意(準備)のできた」(bereit)が新たに派生した。そして、Heyse, Wenig, Heyne の辞書の説明を勘案すれば、19世紀初頭には中世ドイツ語以来の「時を示す用法」は消失し始め、19世紀末には、たとえ辺境の方言等には残っていたとしても、標準語からは完全に消滅した、と言える。

III-2 „zur Hand“ の解釈について ~ Grimm 対 Sanders ~ (1)

22) Sanders (1876) , Bd. 1, S. 681.

Etwas ist, liegt zur Hand, da, so daß man er gleich ergreifen, gleich haben kann, in der Nähe, in Bereitschaft (.) 「„Etwas ist zur Hand, etwas liegt zur Hand“ という事は、あるものが「そこにある」(da sein, da liegen) ので、ただちにそれを掴むことができる、ただちに手に入れることができる、即ち、手近にある、或いは、用意されてある、という事を意味する。」

即ち、Sanders の説明からは時の概念は完全に消え去り、「用意されて」(in Bereitschaft) という新しい概念が全面に押し出されている。しかし、この新しい概念は既に Heyse (1833) の辞書では „bereit“ を使用して説明されていた。そこで、Heyse に始まり Sanders の時代、即ち、19世紀末になると、„zur Hand“ は „sogleich, schnell“ の意味を完全に失い、„bereit, in Bereitschaft“ を意味するように変化した、と言える。

そして、Sanders の辞書では続けてその例文として Goethe の „Wirkung in die Ferne“ の第1連の3行目の後半から6行目にかけて引用されているが、ここでは文意を分かりやすくするために、第一連全八行を引用するが、著者による邦訳はここでは示さず、結論部に於いて提示される。

Die Königin steht im hohen Saal,
Da brennen der Kerzen so viele;

Sie spricht zum Pagen: „Du läufst einmal
Und holst mir den Beutel zum Spiele.
Er liegt zur Hand“
Auf meines Tisches Rand.
Der Knabe der eilt so behende,
War bald an Schlosses Ende.³⁷⁾

ところで、Goethe がここで zur Hand を使用した事は、韻律上の工夫であり、韻律の解釈から説明する事ができる。このバラードの第一連において脚韻は次のように踏まれている：

Saal-einmal (V. 1 と 3), viele-spiele (V. 2 と 4),
Hand-Rand (V. 5 と 6), behende-Ende (V. 7 と 8)

即ち Goethe は、zur Hand の代わりに bereit や in Bereitschaft を使用すると Rand と脚韻が合わないの、或いは真逆に、Rand に脚韻を合わせるために、「完全に時代遅れ」であり、「好ましい語法」ではないが、„bereit, in Bereitschaft“ を表現する事ができる zur Hand を用いている、と解釈する事ができる。しかしそれにもかかわらず、Grimm の辞書ではこの韻律上用いられた zur Hand は「場所」を示す、と誤解されてしまった。

III-3 „zur Hand“ の解釈について ～ Grimm 対 Sanders ～ (2)

次に Grimm の辞書の説明の検討に入りたい。

23) Grimm (1877) , Bd. IV-II, S. 348.

β) zu hand, zur hand, seltener örtlich:

この例文として、不可思議なことに、Grimm の辞書では、Sanders の辞書で „zur Hand“ が „bereit, in Bereitschaft“ を意味する用例として引用されている Goethe の „Wirkung in die Ferne“ 中の同じ詩句が「場所」を示す用例として引用されている。そこで、「比較的稀な用法で、場所を示す」という Grimm の意向に従って邦訳を添えておきたい。

… du läufst einmal
und holst mir den beutel zum spiele.
er liegt zur hand
auf meines tisches rand.
der knabe der eilt so behende,
war bald an schlosses ende.
ちょっと走って行って、
妾にトランプを入れた袋を取ってきておくれ。
それはね、あそこに、
妾の机の上にあるからね。
小姓は、急いで行ったので、
間もなく大奥に着いた。

バラードとはいえ、場所を示す詩句が二つ連続して „zur hand / auf meines tisches rand“ と使われている事こそむしろ「比較的稀な用法」と言うべきである、即ち、それは不合理な蛇足であり、通常は避けられるべきものである。さらに、「19世紀後半になると、„zur Hand“ は „sogleich, schnell“ の意味を完全に失い、„bereit, in Bereitschaft“ を意味するように変化した」、という Sanders に従えば、1877年に出版された Grimm の辞書 (IV-II) の説明は「時代遅れ」と言わざるを得ない。そして、我々のこの見解を裏打ちしているのが、seltener örtlich に直接続く次の説明である。

gewöhnlich zeitlich, in der bedeutung alsbald:

例文：sieht der einen notdürftigen armen menschen, der mangel leidet,
zu hand reichet er im dar von dem das er hat. (Johann Geiler von
Keisersberg : Der Seelen Paradies. 1510.)

貧困に苦しんでいる窮乏した哀れな人を見かけた者は、即座に
自分の持てる物からなにがしかをその人に施すものだ。

: darnach zu hand ist der fiscal herfürkommen. (Luther: Von Er
Lenhard Kaiser. Wittenberg 1528)

その後すぐに検事がやってきた。

: zuhand geet er zu hausz und thut ym selbs den todt an. (Sebastian Frank: Weltbuch. Tübingen 1534.)

彼は、家に帰るや、即座に自殺した。

: wo ein mensch solchen angreift, so stirbt er zu handt. (Conrad Forer: Fischbuch. Frankfurt a. M. 1598.)

人間がそのような（魚を）手で掴むならば、たちどころに死んでしまう。

以上紹介した例文以外に同等数以上の例文が掲載されているが、綴りを見ると 16 世紀中葉前後、即ち、初期新高ドイツ語の例文と思われるが、いずれにせよ、„gewöhnlich zeitlich“ という表題に従う例文であるから、総て zur Hand の「時」を示す用例のみである。しかし、Heyse が既に 1833 年に言及し、Sanders が 1876 年に断言して示したとおり、時代の変化と共に zur Hand の „zeitlich“ を意味する用法は「時代遅れ」(veraltet) になり、その主要な意味は „bereit, in Bereitschaft“ へ変化している。それにもかかわらず、1877 年に出版された Grimm の辞書では „zur Hand“ の意味のこの変化に関して一言も言及されていないのである。即ち、Sanders の辞書は時代の変化に対応できているが、Grimm の辞書は時代のこの変化に対応せず、相変わらず „seltener örtlich“ と陳腐な説明を続けているのである。

IV „zur Hand“ の意味の変化に関する考察

先ず参考にしたいのは次の語源辞典である。

24) Friedrich Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 20. Aufl. Berlin 1967. S. 891.

zuhand:mhd. ... ‚sogleich‘: einer der vielen adv. Ausdrücke, die im Dt. mit Hand gebildet sind (s. ab-, vorhanden, behenden). Im 16. Jh. noch häufig, schwindet z (uhand) seit Opitz aus dem Nhd. und wird von Teller 1794 „Vollst(ändige) Darst(ellung) (und Beurtheilung) d(er) deutschen Spr(ache) in Luthers Bibelübers(etzung)“. 1, 171“ veraltet genannt. Uhlands Belebungsversuch ist erfolglos geblieben.

zuhand: 中世ドイツ語では …‘sogleich‘。(zuhand は) ドイツ語にお

いて Hand と共に形成される多くの副詞的表現の一つである。16 世紀になおしばしば使用されたが、Opitz 以来 Nhd. から消滅していった。そして、1794 年に Teller によって、„Vollständige Darstellung und Beurtheilung der deutschen Sprache in Luthers Bibelübersetzung. Berlin 1794.“ (第 1 巻, 171 頁) において「時代遅れ」(veraltet) と断定された。Uhland による „zur Hand“ の復活の試みは結果を得る事ができないままであった。

Kluge の説明によれば、Opitz は 1597 年に生まれ 1639 年に死んだのであるから、ルター (1483-1546) の死後 50 年後の 17 世紀にはいると „zur Hand“ の「時を示す用法」は衰退していった、そして、19 世紀直前の 1794 年に Teller によってこの用法に「時代遅れ」(veraltet) の判決が下されたのである。それ故、83 年後の、グリムの『ドイツ語辞典』(IV-II) が出版された 1877 年当時になれば、Teller の「時代遅れ」という判決は当然一般に認知されていた、と言うべきである。

そこで、Teller の上記著書の該当頁 (171 頁) を参照すると次のように出ている。

Zuhand für zunächst: I. Mos. 25, 25. „zuhand darnach kam heraus sein Bruder.“

ここでは、Luther 訳聖書の『モーゼ五書の第一の書』、いわゆる『創世記』のヤコブ誕生 (第 25 章の 25) の一文が引用されているのであるが、Kluge は、Teller と共に、Opitz 以来 „zunächst“ の意味で用いられるこの „zuhand“ を「時代遅れ」である、換言すれば、„zuhand“ は „zunächst“ で書き換えられるべきである、と主張しているのである。

しかしここで Teller は「時代遅れ」の根拠に関する言及を行っていない、又、Kluge もその原拠を明示していない。そこで、Teller の上記著書の 2 頁ばかりの前書きを読んでもみると、この書の目的を「Luther の翻訳聖書のドイツ語の表現を、見直して、評価する事」である (... diese Darstellung der deutschen Sprache in Luthers Übersetzung, ... sie in Ansehung der deutschen Sprache genommen, (würdigen))³⁸⁾ と言っている。そして、この観点から第 IV 章のタイトルは „Wörter, welche entweder ganz veraltet oder doch nach der

beygefügten Bedeutung in der guten Schreibart nicht mehr übrig sind.“³⁹⁾ となっているので、Luther が聖書の翻訳に際して用いた „zuhand“ は「全くの時代遅れ」である、或いは、「もはや良き文体ではない」、という Teller の判断を Kluge は引き継いでいるのである。

そこで、Teller のこの判断が正しいかどうか、確認するために、我々は先ず Luther が自らの手で編集・監督した最終決定版（1545 年版）とその後の版を参照し、„zuhand“ はいつ頃まで使用され続けたのか、即ち、時代の変化にどのように対応し、書き換えられ、現代化したのか、或いは、そのような修正は行われなかったのか、という事を確認したい。その際に、通時的に総ての Luther-Bibel を網羅する事は不可能なので、入手する事ができた範囲内という限定付きにならざるを得ないが、それでもおおよその傾向は読み取れるであろう。ちなみに、Luther-Bibel は先ず 1522 年 9 月に『新約聖書』のみを出版した。これは一般に „Septembertestament“ と呼ばれている。そして、先行する『新約聖書』に『旧約聖書』を加えた『ドイツ語訳聖書完全版』は 1534 年に出版されたが⁴⁰⁾、我々は Luther が自らの手で編集・監督した最終決定版 (Ausgabe letzter Hand) (1545 年版) の縮小ファクシミリ版 (1983 年版) (i-1) を使用する。

i) zuhand darnach が使用されている Luther-Bibel :

i-1) Biblia: Das ist: Die gantze heilige Schrift/Deutsch/Auffs new zugericht.
D. Mart(in) Luth(er) . Wittenberg 1545. Leicht verkleinerter Faksimilieter Ausgabe, Stuttgart 1983, S.XIII-2.

„Dann die zeit kam / das sie geben solt / sihe / da waren zwilling in jrem Leibe. Der erst der (h) erauskam / war rötlicht / ganz rauch wie ein fell / Und sie nenneten jn Esau. Zuhand darnach kam er aus sein Bruder / der hielt mit seiner Hand die fersen des Esau.“

Teller の説明 (zunächst) に従えば、zuhand は、「やがて、間もなく」を意味する。他方、darnach は、「その後で」を意味する。すると、zuhand darnach は、双子の Esau が先に生まれると、「やがて、間もなく」(zuhand)「その後で」(darnach) Jakob が生まれた、という事を意味し、この表現にはあまり好ましくない意味上の重複が存在する。

(注:頁数は右頁のみに付けられ、左頁には付けられていない。そこで、ここでは便宜的に、前頁(XVIII)の裏面に相当する左頁数をXVIII-2とした。)

- i-2) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments, nach der teutschen Übersetzung D. Martin Luthers. 80. Aufl. Halle 1777. S. 26.
- i-3) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. 107. Aufl. Halle 1804. S. 26.
- i-4) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. 20. Aufl, od. erste mit Stereotypen gedruckte Ausg. Halle 1818. S. 22.
- i-5) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. 26. Aufl, Stuttgart 1825. S. 27.
- i-6) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. Stuttgart 1827. S. 38.
- i-7) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. Prachtausgabe. Hildburghausen, Amsterdam u. New-York 1836. S. 12.
- i-8) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. Mit einer Vorrede vom Prälaten Dr. Hüffel. Stuttgart 1837. S. 22.
- i-9) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. Mit einer Vorrede vom Prälaten Dr. Hüffel. Carlsruhe u. Leipzig 1837. S. 22.
- i-10) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. Halle 1850. S. 26.
- i-11) Die **Haus-Bibel** oder die ganze heilige Schrift alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. Hildburghausen und New-York 1854. S. 21.
- i-12) Die Bibel oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments

- nach der deutschen Übersetzung Dr. Martin Luthers. Berlin 1863.
- i-13) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. Cöln 1873. S. 27.
- i-14) Die Bibel oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments, verdeutscht von D. Martin Luthers. Wien, Köln **1886**. S. 27.
- ii) zuhand は使用されず, darnach のみが使用されている Luther-Bibel:
- ii-15) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. Hamburg **1865**. S. 26. (Gedruckt auf Kosten der National Bible-Society of Scotland)
„Und danach kam heraus sein Bruder(.)“
- ii-16) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. Im Auftrage der deutschen evangelischen Kirchenkonferenz durchgesehene Ausgabe. 5. Abdruck. Halle a. S. **1895**. S. 26.
„Danach kam heraus sein Bruder(.)“
- ii-17) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments nach der deutschen Übersetzung Dr. Martin Luthers. Philadelphia **1900**. S. 23.
„Danach kam heraus sein Bruder(.)“
- iii) Luther-Bibel 以外の Bibel:
- iii-18) Bibel, Alt vnd new Testament: nach dem Text in der hailigen Kirchen gebraucht. Durch Doctor Johan (n) Eck (1486-1543), 1. Aufl. 1537, 2. Auflage. Ingostadt **1550**. S. XII-2. (=Eck-Bibel, 1. Aufl. 1537)
„von stund an gieng der ander herauß (.)“
(注: 頁数の付け方は Luther-Bibel と同様である, そこで, ここでも前頁 (XII) の裏面に相当する左頁数を XII-2 とした。)
- iii-19) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments, nach Johannes Piscators (1546-1625) Übersetzung; neu durchgesehen und mit dem Grundtext und Luthers Übersetzung verglichen, auf Veranstaltung der Bibelgesellschaft. Bern **1823**. S. 30. (=Piscator-Bibel, 1. Aufl. 1602-1604)

„Danach kam heraus sein Bruder(.)“

iii-20) Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift alten und neuen Testaments übersetzt und neu revidi(e)rt von D. Leander van Ess (Eß) (1772-1847) . Hildburghausen, Amsterdam u. Philadelphia **1838**. S. 14. (=Eß-Bibel, Altes Testament 1822-36, Neues Testament 1807)

„Und nach dem kam sein Bruder(.)“

iv) 現代の Luther-Bibel (revidierter Text) :

iv-21) Die Bibel oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments nach der Übersetzung Martin Luthers mit Apokryphen. Stuttgart **1973**. S. 41.

„Danach kam heraus sein Bruder (.) “

以上の簡易なリストを観察すると、次の二つの特徴が明らかになる。

1) 先ず i で挙げた聖書群では、中世ドイツ語以来 „auf der stelle, sogleich, alsbald“ を意味する „ze-hant“ の用法は初期新高ドイツ語においても、即ち、Luther の時代になっても依然として „sogleich“ の代わりに使われ続け、その語法は、1794 年の「王立科学学士院ドイツ語学特別委員会」(Der engere Ausschuß für die deutsche Sprachkunde bey der Königlichen Academie der Wissenschaft) の会員である Teller が 1794 年に発表した「時代遅れ」であるというは正勸告にもかかわらず、19 世紀末の 1886 年になっても相変わらず使われていた。特にこのような状況を強く支持したのは „Die Haus-Bibel“ (1854) (i-11) である。„Die Haus-Bibel“ とは、その表題の通り、「家庭での使用に役立つ聖書」⁴¹⁾ であると Grimm の辞書は説明している。即ち、一家に一冊供えられるべき聖書として家庭内に備えられ、宗教的のみならず言語的にも民衆に影響を与え、ラテン語に対置される「国語」とも言うべき「我が愛するドイツ語」⁴²⁾ の確立に大いに寄与した。この事情を、Grimm の辞書に引用されている J. Paul の次の一文が明確に伝えている：

daß ich im Schränkchen des untergegangenen Bruders ein altes Hausbibel, worin die Jungen buchstabieren lernten, mit einem weißen Buchbinderblatte gefunden, auf das der Vater die Geburtsjahre seiner Kinder geschrieben hatte.⁴³⁾

(J.Paul: Leben des Quintus Fixlein)

幼い頃一字一字辿りながら学んだ古びた家庭用聖書を、身罷った兄の小さなタンスの中に私は見つけた。その聖書の扉に続いて白紙の頁があり、そこに父は子供達の誕生年を書き記していた。

J. Paul のこの一文からは、ほのぼのとした家庭内における Haus-Bibel の役割が伝わってくる。扉に続く白紙の頁に父親が子供たちの生年月日を書き込む Haus-Bibel は一家の歴史それ自体であり、家族の歴史の証人であり、家族の精神的基盤の一部である。それ故、語学者から見れば学問的に「時代遅れ」と断罪されても、„zuhand“ は、「自分たちの生きた言葉」として民衆の支持を得て、民衆の言語空間の中で 19 世紀末まで生き続けた、と考える事ができる。

2) 当該箇所 の „zuhand darnach“ は Eck-Bibel (iii-18) では „von stand an“ と、EB-Bibel (iii-20) では „und nach dem“ と近代化されているが、神学上 Luther と敵対して訴訟にまで発展していたカトリックの神学者である Eck⁴⁴⁾ によってバイエルン地方の上部ドイツ語で翻訳された『聖書』⁴⁵⁾ はドイツ全土の民衆の家庭の中には広まらず、それ故、Luther-Bibel の影響力を超える事はできなかった。

他方、高名なカトリックの神学者である EB の『聖書』は、「(1821 年の)ローマ教皇庁による禁止令にもかかわらず、カトリックの民衆の心へと響いた」⁴⁶⁾、と言われている、しかし、カトリック系の聖書であるからこそ、EB-Bibe の影響はカトリック圏に限定されざるを得なかった。この点、Eck-Bibel と同様に、EB-Bibel も Luther-Bibel の影響力を超える事はできなかった。それに対して、Luther-Bibel は民衆の言語でしかなかったドイツ語をラテン語に後れを取らない立派な国語へと高める道筋を示したのであるから、ドイツ語圏全体に及んだその影響力は巨大で、EB-Bibel や Eck-Bibel は当然太刀打ちできなかった。それ故、„zuhand darnach“ が言語的に Luther-Bibel の強力な影響下にあった事は注意されねばならない。

ところで、スイス人の Calvin と個人的に知遇を得ていた Piscator (i-19) はルターと同じく改革派の神学者であったが、カルヴァン派に属し、「彼は聖書の翻訳者として知られていた。民衆のために注釈を付けたいわゆる Piscator-Bibel は・・・Lutherbibel と比肩しても劣らないカルヴァン派独自の

聖書を提供していると言われていた。」⁴⁷⁾そして、注目すべき事に、当該箇所は „Darnach kam heraus sein Bruder.“ とドイツ語に翻訳されている。それにも関わらず、受容がカルヴァン派に制限されていた Piscator-Bibel にも、Eck-Bibel や Eß-Bibel と同様に、Luther-Bibel を超えるドイツ民衆への言語的影響力は残念ながら欠けていた。

3) ii-15 (1865) では、当該箇所は „Und danach kam heraus sein Bruder(.)“ と現代化されているが、残念な事に、「スコットランド国立聖書協会の費用で印刷された」(Gedruckt auf Kosten der National Bible-Society of Scotland) という但し書きがあり、純粋にドイツ語圏の内部から必然的に現れ出た要請に従って „zuhand“ が抹消された、と考える事はできない。

むしろ、Luther-Bibel で使用されているドイツ語の最終的現代化が行われたのは、20世紀を直後に控えた1895年に出版された「ドイツ福音(ルター派)教会会議の要請に依る校閲版」(Im Auftrage der deutschen evangelischen Kirchenkonferenz durchgesehene Ausgabe) (ii-16) に於いてであり、そこでは当該箇所は、„Danach kam heraus sein Bruder(.)“ と修正されているので、ドイツ語の言語形態の現代化がほぼ完成した、と言える。事実、この書方は、1973年に出版された現代のLuther-Bibel (iv-21)の文体と全く同じである。

19世紀から20世紀への世紀の転換の年である1900年に米国のフィラデルフィアにあるプロテスタントの一宗派の「バプテスト派出版協会」から出版された聖書(ii-17)は、当該箇所の „zuhand“ が削除され、„Danach kam heraus sein Bruder(.)“ となっていて、文体の現代化が完了した事を証明している。この聖書は、中世ドイツ語に始まり、初期新高ドイツ語に受け継がれた「時」を示す „zuhand“ の亡霊が消えてなくなるまでにおおよそ550年以上を必要とした事を証明している。そして、改革に550年以上の年月を必要とした事を考えると、Lutherがギリシア語から直接翻訳した „Die Haus-Bibel“ のドイツ語こそが自分たちの「国語」(die nationale Sprache)であることを自覚させられ、同時に自覚したドイツ民族の言語領域にLuther-Bibelの「語法」(Schreibart)がいかに強く、深く根付いていたか、思い知らされる。

V „zur Hand“ の「正しい文体」からの逸脱

ここでは「正しい文体」(die gute Schreibart)の領域から „zur Hand“ が逸脱していると Teller が判断した理由は何か、という事が問題になる。そこで先ず、Teller のあの文言をここでもう一度引用し、検討したい。

Wörter, welche entweder ganz veraltet oder doch nach der beygefügteten Bedeutung in der guten Schreibart nicht mehr üblich sind.

ここに於いて Teller は判断基準として二つの事項を提示している：

- 1) „ganz veraltet“ : 「全くの時代遅れである」
- 2) „nach der beygefügteten Bedeutung in der guten Schreibart nicht mehr üblich sind“ : 「当該の言葉に付与された意味から判断すればもはや正しい語法の領域内に留まっていない (もはや領域を逸脱している)」

ここで問題になるのは、„die gute Schreibart“ (正しい文体) である。そこで Schreibart を辞書で調べると次のようになる：

i) Adelung (2. Aufl. 1789), Bd. 3, S.1650:

Schreibart, die Art und Weise, seine Gedanken durch geschriebene Worte auszudrücken.

ii) Heyse (1833, Bd. 3, S. 795)

Schreibart, die Art und Weise, seine Gedanken schriftlich auszudrücken
(für Stil) .

両辞書の説明内容はほぼ同じで、「Schreibart は、自分の考えを文字によって(書かれた言葉によって)表現する方法である」と説明されている。すると、„die gute Schreibart“ とは、書き手が自分の考えを文字によって良く表現し、読み手がその考えを良く理解できる事を目的とした文字による表現方法である、と言える。この考えを „zuhause“ に当てはめると、「すぐに」という時間概念を表現する „sogleich, schnell“ と「手」という身体概念を表現する „Hand“ との間には意味上理解を超える不連続と乖離が存在する。それ故、„Hand“ を用いた時間表現は、ドイツ国民に相応しい標準ドイツ語の「良い文体」ではない、と判断せざるを得ない。それ故、Kluge は、「„zu-hand“ は、16世紀にはよく使用されたが、Opitz 以来 Nhd. からは

消えていった」と言っているのであるが、「新たなドイツの純文学の創始者」⁴⁸⁾であり、「西ヨーロッパのルネサンスに比肩するドイツ語で書かれた純文学を徹頭徹尾要請した」⁴⁹⁾ Opitz から見れば、この用法はドイツに於いて文芸復興を支える「純文学」の言葉たり得なかった、という事である。また、Adelung によれば、1775年当時すでに残っていたのは、„eifrig, fleißig, schnell arbeiten“⁵⁰⁾ の代用として鉱山などの採掘現場で使用される „zur Hand arbeiten“ という言い回しのみであった。それ故、Grimm の『ドイツ語辞典』(IV-2) が出版されたのが19世紀末とも言うべき1877年であれば、„zur Hand“ は粗野で、品位を欠いた、全くの時代遅れの「文体」でしかなかったはずである。

しかし、いつの時代にも復古主義者はいるもので、Kluge に依れば、„zur Hand“ の復古を企てたのは Uhland であったが、「Uhland による試みは成果を上げることができずに終わった。」⁵¹⁾

ところで、Grimm のドイツ語辞典には、„zur Hand“ の用法として「場所」と「時間」を示す二つの説明のみが掲載されていた、しかし、既に1833年の Heyse の辞書には „bereit“ という説明が、又、1876年の Sanders の辞書には „in Bereitschaft“ という説明が掲載されていた。このことは、19世紀中葉になると、「場所」と「時間」を示す zur Hand の用法は「全くの時代遅れ」になり、その同時代的用法は「準備のできた」事を示す用法に変化していた。しかし、Grimm の辞書から「準備のできた」事を示す zur Hand の用法に関する説明は完全に欠落している。この欠落は、辞書の編集者が過去の文献、せいぜいのところ「初期新高ドイツ語」の文献のみに注意を向け、同時代以降の文献に注意を向けていなかった事を示唆している。それ故、この用法に関して Grimm の辞書は、Uhland と同じく、復古的であった、と判断せざるを得ない。

ところで、不可解な事に、Grimm の『ドイツ語辞典』(IV-II) では既に h) (S. 346) において、「„an der hand, bei der hand, zur hand, zu handen sein, stehen“ は、「手を伸ばせば即座に届く所にある事であり、その結果これらの前置詞慣用句は近くにある事や用意のできている事を強調しているのである」、と言っていたのにも関わらず、いざ zu hand の説明 (i-β) (S. 348) になると、zu Hand の「用意のできている事」を示す用法に関する説明は一切見当たらず、既にこの小論の III-3 で示したように、「場所」を示す用法と「時

を示す用法の説明しか掲載されていないのである。この事も、Grimm の編集者が中世ドイツ語の古くさい文献や Luther と同時代の初期新高ドイツ語の文献のみに注意を向け、それ以降の文献に注意を向けていなかった事を傍証している。

VI 場所を示す „zur Hand“ について

最後に残された問題は、Grimm の辞書のみが言及している „zur Hand“ の「場所」を示す用法を明らかにする事である。ここで参考にしたいのは次の文献である。

Karl Ferdinand Becker: Handbuch der deutschen Sprache. Neu bearbeitet von Theodor Becker. 11. verbesserte Auflage. Prag 1876.

「場所」を示す前置詞 „zu“ について Becker は次のように言っている。

Bei Sachnamen gebraucht man z u mit räumlicher Bedeutung nur in gewissen feststehenden Ausdrücken, in denen sich der Gebrauch der älteren Sprache erhalten hat. (S. 359)

事物名詞の場合、空間を意味する „zu“ は、比較的古い文体の用法が保たれているある種の熟語的表現に於いてのみ使用される。

そして、先ず「方向」(wohin)を示す例文として、„zur Hand“ の復古を企てた Uhland の „Roland Schildträger“ の次の詩句が引用されている：

…mein Sohn Roland!

Nimm Schild und Lanze schnell zur Hand. (a, a, O)

…我が息子ローラントよ！

盾と槍を早く手に取れ。

注：とある英語の注釈では、„Nimm zur Hand“ は、„take in your hand, i.e. take up“ であると。⁵²⁾

：etw. zur Hand nehmen は多くの独和辞典に掲載されている。「…を手に取る」(独和大辞典 小学館 1985 年, 973 頁), 「或物を手に取る」(相良大独和辞典 博友社 1972 年, 654 頁)「手に取る」(独和中辞典 研究社 1996 年, 631 頁), 「物を手に取る」(フロイデ独和辞典 白水

社 2003 年, 644 頁)

次に「場所」(wo)を示す用法として, „zu Hause sein“ と共に, „zur Hand sein“ を例文なしで上げているだけであるが, グリムの辞書では, この例文として, Goethe の „Wirkung in die Ferne“ が掲載されていたのである。

Sie (Königin) spricht dem Pagen: „Du läufst einmal
Und holst mir den Beutel zum Spiele.
Er liegt zur Hand“
Auf meines Tisches Rand.
Der Knabe, der eilt so behende,
War bald an Schlosses Ende.

そして, 続けて Ferdinand Freiligrath が 1850 年に創作した „Die Weihnachts-
lied für meine Kinder“ の次の詩句 (第 8 連 5 行目) が掲載されている。

Zur Hand im Schnee starr liegt ein Reh,
Blutrünstig, frisch geschossen;⁵³⁾

この詩句を解釈すると, たった今銃で撃たれたばかりの鹿が鮮血にまみれて雪の上に身動きもしないで横たわっている, と言うのであるから, そのような鹿が前もって, あらかじめ「用意されて」ある, という可能性は非常に低い, 即ち, 「撃たれたばかり」(frisch geschossen)で, 純白の雪の上に鮮血にまみれて身動きもしない鹿を即座に「用意する」事は, 引きずった痕跡もないことから, 不可能である, すると, „zur Hand“ は鹿が横たわっている「場所」, 即ち, 「雪の上のそこに」を示している, と考える方が合理的である。

他方, „Wirkung in die Ferne“ の場合, 王女は, トランプゲームをしたくなるかもしれない, と考えて, あらかじめカードを袋に入れて自分の机の上に置いておけば, 「急いで」(behende) 取りに行く小姓も迷う事もなく持って来る事ができる, と考えて「用意しておいた」, と解釈する方が合理的である。

ここで, 入手した二例の邦訳を検討したい。

片山敏彦訳 (1936 年)

…女王御座まして、側近の童に
宜りたまひけり。—花開いて興ずるほどに文机の上の
金袋を小走りに取り寄せてたもれ。—⁵⁴⁾

高安国世訳 (1960 年)

女王が小姓に言う 「カルタをしようと思うから
一走り行って袋を取って来ておくれ
袋は私の机の上に
出ていたはず」⁵⁵⁾

先ず片山訳で用いられている「花開いて興ずるほどに」は「宴も酣になつて」⁵⁶⁾、「楽しくなったので」⁵⁷⁾ という意味なので, „zur Hand“ とは関係がない, 又, 「文机の上の金袋」という邦訳は, 「用意してある」という概念を表現する事はできない。そこで善意に解釈すれば, 1877 年に出版された Grimm の辞書 (IV-II) を参照して, „zur Hand“ は「場所」を示している, と片山は理解し, 「文机の上」と邦訳した, とも言えよう。

他方, 高安訳で用いられている「袋は私の机の上に／出ていたはず」の「はず(筈)」は, 国語辞典によると, 「物事が当然そうなること。道理。理屈。筋道。転じて, 予定・てはず・約束などの意にもいう。」⁵⁸⁾ この辞書の説明に従うと, 高安訳で用いられている「はず(筈)」は「用意のできている」という概念の射程内にある, とは言い難い, しかし, 完全に圏外であるとも言えない, むしろグレーゾーン内, しかも圏外に近いグレーゾーンにある, と言えば良いであろうか。

そこで, 日本語と比較すれば, 語族だけではなく語派も同じであり, それ故, 翻訳に際して共通性を潜在的に有し, 日本語と比較して遙かに有利な英訳を参照したい。

Lawrence Snyder 訳

She says to the page: “Run once more
And fetch me the bag with our games.

It lies close at hand
On my table's edge."
The boy was so fleet of foot,
He was soon at the back of the castle. ⁵⁹⁾

先ず, The Random House Dictionary of the English Language. Second Edition Unabridged. (New York 1987) によると, „at hand“ は „ready for use“ (S. 865) と説明されている。

又, Webster's New World Dictionary, College Edition. (Cleveland and New York 1959) に依ると, „at hand“ は „ready : prepared“ (S. 656) と説明されている。

更に、『ジーニアス英和辞典 改訂版』(大修館 1994 年)では, „at hand“ は [しばしば near, close と共に]用いられる (818 頁), と注が付けられている。それ故, 上記三冊の辞書の説明を総合して考えれば, „close at hand“ は「すぐに使用する用意のできている」と理解する事ができるので, 英訳で使用されている „close at hand“ はドイツ語の „zur Hand“ の正しい解釈に基づいた適切な翻訳である, と言える。この英訳に比較すると, 上に挙げた二例の邦訳は残念ながら適切な翻訳であると言うにはほど遠い。

VII 結論

以上の考察から, 結論として我々は次のように言う事ができる: 即ち, Goethe のバラード „Wirkung in die Ferne“ 中の „zur Hand“ が „bereit, in Bereitschaft“ を意味する, と解釈した Sanders が正しく, „örtlich“ を意味する, と解釈した Grimm は誤りを犯している。

そこで, 以下に Sanders の説明に基づいた試訳を掲げ, この論考の到達点としたい。

Die Königin steht im hohen Saal,
Da brennen der Kerzen so viele
Sie spricht zum Pagen: „Du läufst einmal
Und holst mir den Beutel zum Spiele.

Er liegt zur Hand

Auf meines Tisches Rand.

Der Knabe, der eilt so behend,

War bald an Schlosses Ende.

女王は天上の高い広間に屹立していた、

そこにはたくさんの蠟燭が点っていた。

女王は小姓に言った：ちょっと走って行って、

妾にトランプを入れた袋を取ってきておくれ。

それはね、妾の机の上に

用意してあるからね。

小姓は、急いで行ったので、

間もなく大奥に着いた。

中世ドイツ語において「時間」を示す „zur Hand“ の用法は、既に 18 世紀末の Adelung や Teller の時代には「完全に時代遅れ」になり、「良き文章語」(gute Schreibart) の範疇から逸脱していた。そして、この「時間」を示す古い用法に代わって出現した新しい用法が、「手を伸ばせば掴むことができる程の手近にある」(greifbar, nahe) という 15 世紀以来の本来の用法⁶⁰⁾ から派生した「用意のできた」事を示す用法である。そして、その例文として Sanders の辞書には Goethe の „Wirkung in die Ferne“ の „Er liegt zur Hand / auf meines Tisches Rand“ が掲載されていた。

他方、„zur Hand“ の「時間」を示す用法と共に、Becker によって (1876 年) 「古くなってしまった表現法」(die ältere Sprache) と切り捨てられた「場所」を示す用法に固執した Grimm の辞書は、Sanders と同じ例文の „zur Hand“ を「場所」を示す用例である、とする時代錯誤的な誤りを犯してしまった。我々の論考に従えば、Grimm の辞書のこの錯誤の原因は二つ考えられる：

- 1) 中世ドイツ語、初期新高ドイツ語などの古すぎる (älter) 文献に捕らわれ、それ以降の新しい時代の用法をかたくなに認めようとしなかった事
- 2) Luther-Bibel の絶大なる影響力に捕らわれていた事

その結果、Grimm の辞書は、現代のドイツ語辞典にも掲載されている⁶¹⁾ 「用意のできた」という „zur Hand“ の新しい時代の用法を受け入れること

ができなかったので、「成果を得る事ができなかった」Uhland と共に、徒勞に終わった復古主義に捕らわれ、時代と共に言葉も変化する、という視点を失っていた、と我々は結論づける。

そして、最後に一言付け加えれば、„litteratura“⁶²⁾ に携わる者は、„que en realidad la lengua cambia“ (現実には言葉は変化するという事)⁶³⁾ を銘記すべきである。

本文中で使用されたドイツ語辞典のリスト (ただし、本文中に書き込まれている英語辞典、独和辞典、Lexikon 等は含めない) :

Johann Christoph Adelung: Versuch eines vollständigen grammatisch-kritisches Wörterbuches der hochdeutschen Mundart. 5 Bde. 1. Aufl. Leipzig 1774-1786.

Johann Christoph Adelung: Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart. 4 Bde. 2. Aufl. Leipzig 1798, Nachdruck Hildesheim. 1970.

Erhard Agricola: Wörter und Wendungen. Wörterbuch zum deutschen Sprachgebrauch. Leipzig 1973.

Brockhaus-Wahrig: Deutsches Wörterbuch. 6 Bde. Wiesbaden u. Stuttgart 1980-1984.

Joachim Heinrich Campe: Wörterbuch der deutschen Sprache. Braunschweig 1807-13. Nachdruck Hildesheim und Tokyo 1969.

Duden. Stilwörterbuch der deutschen Sprache. Der Große Duden Bd. 2. 6. Aufl. Mannheim 1971. (= Duden I, Bd. 1~10)

Duden. Etymologie. Herkunftswörterbuch der Deutschen Sprache. Der Große Duden Bd. 7. Mannheim 1963.

Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. 8 Bde. 2. Aufl. Mannheim 1993-95. (= Duden II, Bd. 1~8)

Alfred Götze: Frühneuhochdeutsches Glossar. 7. Aufl. Berlin 1968.

Grimm, Jacob u. Wilhelm: Deutsches Wörterbuch. 16 Bde. Leipzig 1854-1960.

Moriz Heyne: Deutsches Wörterbuch. 2 Bde. 2. Aufl. Leipzig 1905-06. Nachdruck Tokyo 1973.

Ruth Klappenbach u. Wolfgang Steinitz: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. 6 Bde. Berlin 1964-77.

- Friedrich Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 20. Aufl. Berlin 1967. (= Kluge, 20. Aufl.)
- Friedrich Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 1. Aufl. Straßburg 1885. (= Kluge, 1. Aufl.)
- Matthias Lexer : Mittelhochdeutsches Handwörterbuch. 3 Bde. Leipzig 1872-1878.
- Meyers Enzyklopädisches Lexikon. Bd. 30-32: Deutsches Wörterbuch. 3 Bde. Mannheim 1979-82 (= Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache). (=Meyers Lexikon)
- Hermann Paul: Deutsches Wörterbuch. 6. Aufl. Tübingen 1966.
- Wolfgang Pfeifer: Etymologisches Wörterbuch des Deutschen. 2. Bde. Berlin 1989.
- Daniel Sanders: Wörterbuch der deutschen Sprache. 4 Bde. Zweiter unveränderter Abdruck. Leipzig 1876, Nachdruck Tokyo 1968.
- Kasper Stieler: Der Teutschen Sprache Stammbaum und Fortwachs oder Teutscher Sprachschatz. 3 Bde. Nürnberg 1691, Nachdruck Hildesheim 1968.
- G. Wahrig: Deutsches Wörterbuch. Gütersloh 1975, 1980.
- Chr. Wenig: Handwörterbuch der deutschen Sprache. 7. Verbesserte und vermehrte Aufl. Köln 1885. S. 376.

注

- 1) Vgl. Gero von Wilpert: Goethe-Lexikon. Stuttgart 1997. S. 162.
- 2) Goethes Werke. Dreiunddreißigster Teil. Naturwissenschaftliche Schriften. Erster Band. Hrsg. v. Rudolf Steiner. Berlin u. Stuttgart (ohne Datum). Anm. 1-6. S. 277. (Deutsche National-Literatur. Historisch kritische Ausgabe. 114. Bd. Hrsg. v. Joseph Kürschner.) Neudruck Tokyo 1974. (= Kürschner)
- 3) 大鶴正満 : [総説] ゲーテの切歯縫合 (顎顎骨) について。琉球大学学術リポジトリ Ryukyu Med. J., 19 (2) 2000. S. 54.
<https://u-ryukyu.repo.nii.ac.jp/record/2016106/files/v19p53.pdf>
採取日 : 2024/10/09
- 4) Metzler Goethe Lexikon Hrsg. V. Benedikt Jeßing, Bernd Lutz u. Inge Wild. Stuttgart u. Weimar 1999. S. 563.
- 5) Vgl. Kürschner, a. a. O.

- 6) Goethe Handbuch. Bd. 3. Hrsg. Bernd Witte u. a. Stuttgart・Weimar 1997. S. 674.
- 7) Vgl. Kürschner, a. a. O.; ワイマール版では, “Versuch aus der vergleichenden Knochenlehre daß der Zwischen-knochen der oberen Kinnlade dem Menschen mit den übrigen Thieren gemein sei“ という古い表題が使用されている。In: Goethes Werke. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. II. Abtheilung 8. Bd. Weimar 1887. 91~169. (= Weimarer Ausgabe)
- 8) Kürschner, S. 296.
- 9) (改造社版) ゲーテ全集 第26巻 東京1935年, 578頁。
- 10) 伊藤卓立: KHM 106における „sich hinter den Ofen setzen“ について リュンコイス 第56号 23-59頁参照。
- 11) Jacob u. Wilhelm Grimm: Deutsches Wörterbuch. IV. Bd. II. Abteilung. Leipzig 1877. S. 346
- 12) A. a. O., S. 348.
- 13) Chr. Wenig: Handwörterbuch der deutschen Sprache. 7. verbesserte und vermehrte Aufl. Köln 1885. S. 376.
- 14) A. a. O.
- 15) Friedrich Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 20. Aufl. Berlin 1967. S. 891.
- 16) Heinrich Heine: Sämtliche Werke. Vierter Band. Hrsg. v. Rudolf Frank. München u. Leipzig 1923. S. 246.
- 17) Heinrich Heine's Sämtliche Werke. 1. Bd.:Reisebilder. 5. Aufl. Philadelphia 1860. S. 254.
- 18) 岩崎英二郎: ドイツ語副詞辞典, 東京1998年, 1270頁。
- 19) Kürschner I. Teil, 1. Bd., S. 296.
- 20) Weimarer Ausgabe, 1. Bd., S. 22.
- 21) 人文書院版『ゲーテ全集』第1巻 京都1960年, 254頁。
- 22) Grimm, S. 348.
- 23) Daniel Sanders: Wörterbuch der deutschen Sprache. 1. Bd. Leipzig 1876, Neudruck Tokyo 1968. S. 681.
- 24) この小論で使用されるドイツ語辞典のリストが本文末にあるので, 本文中や注では, 煩雑を避けて, 名前と最小限度の情報が示されているだけなので, 詳細はリストで確認することができる。

- 25) 邦訳は、特別に注がない限り、総て小学館の『独和大辞典』（東京 1985 年）に従った。
- 26) 木下空太郎の誤読・誤解・誤訳に関して次を参照：
石原あえか：ゲーテと木下空太郎 皮膚科学との交わりを中心に。東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要 第 20 号 2013 年, S. 9f. URL は以下：
https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/record/39270/files/Language_Information_Text_v20-1.pdf
(取得日：2024 年 10 月 14 日)
- 27) 次の独和辞典を参照：
佐藤通次：独和言林 東京 1968 年, 569 頁。
相良大独和辞典 東京 1972 年, 637 頁。
- 28) 岩崎英二郎, 435 頁。
- 29) ハイネ全集 第 6 卷, 東京 1933 年。202 頁。
- 30) ハイネ散文作品集 第 2 卷, 東京 1990 年。158 頁。
- 31) Weimarer Ausgabe, 1. Bd. 1887. S. 22.
- 32) 片山敏彦：ゲーテ詩集（一） 東京 1952 年 37 頁。（岩波文庫）
- 33) 山口四郎：ゲーテ全集 1 東京 2003 年 17 頁。
- 32) Weimarer Ausgabe, 14. Bd., S. 41.
- 33) A. a. O., S. 43.
- 34) この注で使用されている説明, 例文, その邦訳は岩崎英二郎『ドイツ語副詞辞典』東京 1998 年 83 頁。
- 35) Kark Ernst Georges: Ausführliches lateinisch-deutsches Handwörterbuch. 2. Bd. Basel / Stuttgart 1969. S. 2037.
- 36) 注 33 に同じ。
- 36a) Vgl. Lexer Bd, III, S. 584. この für は副詞で, vor, nach vorne hin, hervor, hinaus, voraus, vorbei, vorwärts の意味である。
- 37) Weimarer Ausgabe, 1. Bd., S. 202.
- 38) Teller の当該書の「前書」には頁番号が付けられていないが, 本文の直前の二頁に相当する。
- 39) Teller, S. 49.
- 40) Vgl. Meyers enzklopädisches Lexikon. Bd. 15. Mannheim/Wien/Zürich 1975.

S.347.

- 41) Grimm, IV-II, S. 654.
- 42) Weimarer Ausgabe, 14. Bd., S. 62.
- 43) Jean Paul : Leben des Quintus Fixlein, aus funfzehn Zettelkästen gezogen; einem Mustheil und einigen Jus de tablette. Bayreuth 1796. S. 283. Grimm の辞書では当該箇所は頁数は 208 になっているが、正しくは 283 である。
Text は以下の URL でも参照する事ができる：
<https://www.projekt-gutenberg.org/jeanpaul/fixlein/fixln211.html>
- 44) vgl. Meyers Enzyklopädisches Lexikon. Bd. 7, S. 393; Kindlers neues Literatur-Lexikon. Bd. 5, S. 15.
- 45) Walther Killy: Literatur-Lexikon. Bd. 3. Gütersloh/München 1989. S. 165.
- 46) Meyers große Konversations-Lexikon. 6. Bd. Leipzig u. Wien 1907. S. 114.
- 47) Walther Killy: Literatur-Lexikon. Autoren und Werke deutscher Sprache. Bd. 9. Gütersloh/München 1991. S. 172.
- 48) A. a. O., Bd. 8, S. 504.
- 49) Meyers Lexikon, Bd. 17, S. 678f.
- 50) Adelung (1775), S. 940.
- 51) Kluge, S. 891.
- 52) C. G. H. Bielefeld: Ballads of Uhland, Goethe, Schiller. Fifth Edition. London 1890. S. 54.
- 53) Ferdinand Freiligrath's gesammelte Dichtungen. 5. Auflage. 3. Bd. Stuttgart 1886. S. 202.
- 54) 改造社版 ゲーテ全集 第1巻 東京 1936年, 300頁。
- 55) 人文書院版 ゲーテ全集 第1巻 京都 1960年, 254頁。
- 56) 日本国語大辞典 第10巻 第2版 東京 2002年, 1307頁参照。
- 57) 同上, 第4巻 2001年, 454頁参照。
- 58) 同上, 第10巻 1123頁。
- 59) https://www.lieder.net/lieder/get_text.html?TextId=6497%20effect%20from%20afar
(取得日:2024年11月10日)
- 60) Wolfgang Pfeifer: Etymologisches Wörterbuch des Deutschen. 2. Bd. Berlin 1989. S. 641.
- 61) 以下の辞典を参照：

- Der große Duden. Stilwörterbuch der deutschen Sprache. S. 335.
Wörter und Wendungen hrsg. v. Aggricola. S. 297.
Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache hrsg. v. Klappenbach. Bd. 3, S. 1710.
Meyers Enzyklopädisches Lexikon, Bd. 31. 1980. S. 1136.
Brockhaus-Wahrig. 3. Bd. S. 388.
Duden·Das große Wörterbuch. Bd. 3, S. 1460.
- 62) vgl. Paul, 402; und Otto Basler: Deutsches Fremdwörterbuch. 2. Bd. Berlin 1942. S. 32.
- 63) Eugenio Coseriu: Sincronía, diacronía e historia. El problema del cambio lingüístico. Madrid 1978. S. 15.

後記

今から 40 年前に、生物資源科学部のドイツ語研究室で、1 週間に 1 回、輪読会が行われていた。ある時その会で初めて nach der Hand に出会った。皆目、見当がつかなかったが、Grimm や Sanders の辞書は近寄りがたかったので、手取り早く、文理学部の独文で教鞭を執っていたインナーホフナー氏に尋ねたところ、「古い言い回しなので、難しいでしょう」、と言って、色々説明してくれた。説明を聞いていると、これはどうやら danach の意味合いではないか、と思われた。次の輪読会で「danach 程の意味合いらしい」と報告した。そこで、参加者全員でテキストを確認すると、意味はそれなりに通じた。そこで、小松崎先生は、「伊藤、辞書で調べろ」、と、私に辞書を持ってこさせた。まずは Sanders の辞書を広げた。すると Bd. II, S. 681 に „namentl. Zeitlich = nachher, hinterher“ という説明を見つけ、歓喜勇躍した。これは、私の修行時代の貴重な体験の一つになった。

令和六年に喜寿を迎え、何かと若い頃が思い出されるが、輪読会を主催し、このように若い連中を鍛えてくれた小松崎先生、そして Grimm と Sanders の辞書を読む基礎を築いてくれた藤村宏先生に感謝である。藤村先生には、Jacob Steiner: Rilkes Duineser Elegien を博士課程で 2 年と半年間一緒に読んでいただき、詩を「読む」、言葉を「読む」とは如何なる事か、という事を徹底的に仕込まれた。一点一画までもおろそかにせず、とこと

ん追求して読む、分からなければ、辞書を読む、Grimm を読む、Sanders を読む、という外国文学研究の基本姿勢を指導された。しかし、先生は、文学の中身は本人の資質に大きくかかわる事なので、本人に任せる、と考えていたようであった。Steiner のこの書は、1975 / 76 年に留学したマインツまで持参し、冬学期が始まるまで屋根裏の下宿で1ヶ月半ほどかけて、読み残した部分（全体の50%強）を読み終わらせた。本文末に書き込まれた読了の日付を見ると、1975年9月16日、22時30分になっている。当時は、毎晩10時までSteinerを読み、それから5マルク硬貨を一枚持って Sömmering Platz 沿いにある Lokal Königsbacher Eck に行き、ビールを飲みながら、「飲み屋ドイツ語」の練習に励んだ。会話に堪能であった藤村先生は、ドイツへ向かう直前の私に、「会話はできなくても良いが、文学を読む場合に役に立つこともある」、という「はなむけの言葉」を送ってくれた。

こうして私は修業時代歩んで来たのであるが、この度も、40年近く放置していた nach der Hand を初めて本格的に追求し、zur Hand まで辿り着き、このささやかな小論を物することができた。私は、このまま私の終わらぬ修業時代を、これからは一步一步ゆっくりであっても、進む事ができるならば、学恩に少しでも報いる事ができ、それはこの上ない喜びである。